

古代エジプトの稀観本：シャンポリオン 『エジプトとヌビアの記念物』

馬場 匡浩*

ヒエログリフ。言わずと知れた古代エジプトの言語である。エジプト文明は 3000 年にも及ぶ長い歴史と独特の文化を育んだことで知られるが、中でも優美な造形で表現されたヒエログリフは、古代エジプトの 1 つの表象といっても過言ではない。ヒエログリフは、王朝時代を通じて「神の言葉」として神殿や墓の壁に装飾のごとく刻まれ続けたが、クレオパトラ 7 世の自害で文明が幕を閉じた紀元前 30 年以降、ローマやイスラームの侵略により次第に忘れ去られてしまった。死語となってしまったこの古代言語に再び命を吹き込んだのが、フランスのジャン＝フランソワ・シャンポリオン (Jean-François Champollion) である。1822 年に彼が解読に成功したことで、古代の人々の歴史、宗教、文化を理解する扉が開かれ、エジプト学たる分野の礎が築かれたのである。シャンポリオンは今なお「エジプト学の父」として歴史に名を残す研究者であるが、その彼が自己の解読方法を検証するため現地エジプトで実施した調査の成果が、『エジプトとヌビアの記念物 (Monuments de l'Égypte et de la Nubie)』である。19 世紀前半のエジプト学揺籃期を代表するこの稀観本が今年度、明治大学図書館に加わった。そこで本稿では、著者シャンポリオンの生い立ちとヒエログリフの解読を巡る話を中心に紹介したい。

*ばば・まさひろ／早稲田大学エジプト学研究所助教／明治大学文学部兼任講師

話は18世紀末まで遡る。1798年、フランス革命の司令官ナポレオン・ボナパルト（Napoleon Bonaparte）は、敵国イギリスの統治下にあったインドとの交易路を遮断するため、大軍を率いてエジプト遠征を敢行する。圧倒的な力でカイロを制圧するも、その後間もなく「アブ・キール湾の海戦」でイギリス軍に惨敗し、海路を絶たれたフランス軍はその後3年間エジプトに取り残されることとなる。だが、この時の軍事遠征は通常とは異なり、ナポレオンはフランス学士院の科学者や技術者など167名の学者を同行させていた。彼らはこの間を利用してエジプトからヌビアまでを踏査し、古代建造物から現地の風習に至るあらゆる資料の記録収集を行う。中でも最大の収穫が、デルタ西部のアル＝ラシード町（英語名ロゼッタ）で発見された「ロゼッタ・ストーン」である。1799年、ピエール・サヴィエル・ブシャール中尉の監督のもとイギリスの攻撃に備えて進められていた15世紀のカイト・ベイ城塞の改修工事中、その基礎部分からロゼッタ・ストーンは見つかった。灰色花崗岩製のこの石碑は、高さ114cm、幅72cm、厚さ28cmと巨大であり、表面には上からヒエログリフ（聖刻文字）、デモティック（民衆文字）、ギリシア文字の3種類の異なる文字が対訳碑文として刻まれている。その内容は、プトレマイオス5世が施した恩恵に対する臣民の感謝と戴冠1周年記念の大祭に関する勅令であり、このことから石碑が紀元前196年に製作・建立されたことがわかる。

さて、ヒエログリフがまだ解読されていない当時であっても、フランス軍の学者たちはこれが解読の鍵となるとの重要性を認識していた。しかし、敗北で迎えた1801年のアレクサンドリア協定により、他の主だった遺物とともにロゼッタ・ストーンはイギリス軍に没収されてしまい、大英博物館にイギリスの至宝として現在まで展示されるに至っている。だが、フランスの学者は、引き渡す前に碑文の写しを取り、本国に持ち帰ったのだ。この学者たちの研究に対する意地と熱意が、後にシャンポリオンに運命的な出会いをもたらすこととなる。なお、調査で収集した他の記録も本国に持ち帰られ、その一部は『エジプト誌（Description de l'Égypte）』として刊行され、これが契機となりヨーロッパにエジプト・ブームが巻き起こることとなる。

シャンポリオンは、まさにヨーロッパがエジプト熱を帯び始めたこの時

代に活躍した人物である。

シャンポリオンは1790年12月23日、フランス南西部の町フィジャックに生まれる。父親が本屋を営んでいたという家庭環境にあり、また歴史好きの読書家であった兄ジャック＝ジョゼフ・シャンポリオン (Jacques-Joseph Champollion) に勉強を教えてもらっていたこともあり、シャンポリオンは次第に歴史学や古代言語学に惹かれてゆく。10歳になりフィジャックを離れ、兄のいるグルノーブルに移り住み、リセ (高等学校) に入学する。そこで、彼の人生を決定付ける大きな転機が訪れる。兄に連れられて向かったジョゼフ・フーリエのサロンでのことである。フーリエとはフーリエ解析理論で有名な数学・物理学者であり、ナポレオンのエジプト遠征にも参加していた人物である。シャンポリオンは、そこで初めて古代エジプトの資料を目の当たりにし、フーリエからロゼッタ・ストーンの存在について教えられ、そしてヒエログリフがまだ誰も解読できていないことを知る。彼はこの時、自分が最初に解読することを決意するのである。その目標に向かって突き進み、12歳になる頃にはすでにヘブライ語、アラビア語、シリア語、カルデア語、中国語の基礎を身につけ、その後もコプト語を中心に、エチオピア語、サンスクリット語、アヴェスタ語、パフラヴィー語、パールシー語、ペルシア語など様々な言語を学んでいった。

16歳で、グルノーブル科学芸術アカデミーの前で論文を発表し、「現在あるコプト語は古代エジプトの言語と同じである」ことを主張。その後、1807年から3年間、フランスで最高の高等教育研究機関であるパリのコレージュ・ド・フランス (Collège de France) においてさらに研究を進める。ここでは特に、古代エジプト語解読の鍵と考えたコプト語の研究に打ち込み、その文法書を完成させるに至る。1809年、弱冠18歳にしてグルノーブル大学文学部の助教授に就任し、歴史と政治について教えるようになる。教鞭を執る傍ら、『ファラオ支配下のエジプト (Introduction à l'Égypte sous les Pharaons)』を刊行するなど執筆活動も精力的に行う。1818年には同大学の学部長にまで登り詰めるが、その職を辞した1821年以後、彼の研究はさらなる発展を遂げ、ヒエログリフ解読へと一気に迫っていく。

そしてついに1922年、ロゼッタ・ストーンの写真とフィラエ島のオベリスクの写真などの比較研究によりヒエログリフの解読に成功。すぐに兄

のもとに駆けつけ「やったぞ!」と叫ぶと同時に、過労で倒れてしまったと言われる。その成果を兄とともにまとめ、『ムッシュー・ダシエへの書簡 (Lettre à M. Dacier)』として報告する。その後は、解読の検証とヒエログリフの理解をさらに深めるため、海外調査に乗り出す。

1824年、フランス王ルイ18世とシャルル10世の援助を受けてイタリアに赴き、トリノ、レグホーン、ローマ、ナポリ、フィレンツェの博物館に収蔵される古代エジプト・コレクションの調査を実施。そして1828年には、彼にとって最初で最後となる現地エジプトでの調査を敢行する。調査中のワディ・ファルファ(ヌビア)からダシエに送った手紙には、遺跡を目の当たりにしたシャンポリオンがどれほど興奮し、いかに自身のヒエログリフ解読法が正しかったが述べられている。「私たちが見つけ出したヒエログリフの読み方に修正点はありません。それは首尾良く、全ての建造物の碑文に適用できるのです!」。後に詳述するが、この調査の成果が本稿で紹介する『エジプトとヌビアの記念物』となる。

帰国後の1831年、コレージュ・ド・フランスが彼のために新たに設立したエジプトの歴史・考古部門の長に任命され、さらにフランス学士院のメンバーになる。研究者として最高の環境を得たのも束の間、パリにて脳卒中で倒れ、1832年3月4日、研究半ばで42年の短い生涯に幕を閉じる。

シャンポリオンは11歳の決意から足かけ10年でヒエログリフの解読を達成したのであるが、それに挑んだ研究者は他にもいた。次にその解読の歴史を追ってみよう。

解読の試みは17世紀からすでにあるものの、科学的な研究へと飛躍したのはやはりロゼッタ・ストーンが発見された1799年以降のことである。最初の挑戦者はフランスのシルヴェストル・ド・サシ(Baron Sylvestre de Sacy)男爵である。1802年にはすでにロゼッタ・ストーンのギリシア語銘文の翻訳が送回っており、それをもとにまずはデモティックの箇所に取り組み、ギリシア語の固有名詞に対応するデモティックの文字を抽出することに成功する。そして、その文字に音価を与えたのが、スウェーデン人ヨハン・オケルブラッド(Johan Åkerblad)である。サシの弟子である彼は、29の文字をアルファベットとして認識し(約半分は正しい)、「デモティックでは外国語の固有名詞をアルファベットで表している」ことを発見した。

しかし彼らは、デモティックの全ての記号がアルファベットと考えていたため、研究はそれ以上進まなかった。

ここで、古代エジプト語について簡単に説明しておきたい。紀元前 3000 年頃の王朝成立と時をほぼ同じくして「ヒエログリフ」は誕生する。その後の長い王朝の歴史の中で、文法構造などが変化するものの、ヒエログリフは使われ続ける。その中で、書記が素早く書くためにヒエログリフの草書体である「ヒエラティック」が生まれ、末期王朝が始まる紀元前 664 年以降には、ヒエラティックをさらに簡略化した「デモティック」が登場し主要な言語となっていく。そして最後に、キリスト教がエジプトに普及する紀元後 2 世紀頃に「コプト語」の使用が始まる。これはデモティックを継承しつつもギリシア文字のアルファベットを加えたものであり、紀元後 7 世紀のイスラーム征服後も、キリストの教会では現在でも典礼の言語として使われている。このように古代エジプト言語は変化してきたが、その根源はヒエログリフにある。ヒエログリフは 1 つ 1 つの文字が美しい象形で表現されるが、これらは全て音価を持つ。文字の総数は約 700 とされ、その内 24 の音価を表すアルファベットが存在する。母音は無く全てが子音のみで表現される。また 1 文字で 2 つ、または 3 つの子音の音価を持つ文字もある。さらに、発音はしないが単語の最後に書き加えて意味を限定させる文字記号（限定符）も存在する。つまり、ヒエログリフは基本的には音価をもつ「表音文字」であり、限定符のように絵文字的な「表意文字」の要素も含まれているのである。この複雑さが解読作業を最も困難にさせ、かつその発見こそが解読の鍵となったのである。

さて、サシ等の研究後、大きな一歩を踏み出したのは、イギリスの物理学者トマス・ヤング（Thomas Young）である。10 代でラテン語やギリシア語など様々な言語に精通していた彼は、1814 年にロゼッタ・ストーン（石版）の解読に挑戦する。ヤングはデモティックが本質的にアルファベットとは異なること、ヒエログリフのカルトゥーシュ（楕円形の枠）の中に書かれた文字が王名であることを突き止めた。さらに、表音と表意が存在すること、デモティックの用法がヒエログリフと近似することを認識するに至る。同じイギリス人で古物蒐集家のウィリアム・バンクス（William J Banks）は、エジプトのフィラエ島から自分の庭園に運んだオベリスクの碑文を調

べ、カルトウーシュの王名が「クレオパトラ」であると読み取った。イギリス人の研究は着実に前進したものの、古代エジプト語が基本的には表意文字であり、限定的に表音文字が使われているとの考えから脱することができなかった。ただし、彼らの功績はシャンポリオンが成功を収める土台となったことは確かである。

シャンポリオンもパリに移った1807年からロゼッタ・ストーンの写本を資料に本格的な解読研究に乗り出す。徹底的に取り組んでいたコプト語を頼りに、彼もまたヒエログリフが音価を持つこと、さらに母音を表記しないことも認識するに至る。ヤングが表音の存在を示唆して間もない1921年には、デモティックとコプト語はヒエログリフを起源に持つ同じ言語体系にあることを発表。そして1922年、悲願の解読に成功する。その手順は、ヤングやバンクスと同様、彼もまずロゼッタ・ストーンとフィラエ島のオベリスクのカルトウーシュに着目し、それが王名であると仮定する。「プトレマイオス」と「クレオパトラ」の各文字にコプト語の音価を当てはめ「PTLMIS」と「KLEOPATRA」とし、そこに共通する「O」「P」「L」のヒエログリフの音価を特定した。2人の王名は外来のギリシア語であるため、ヒエログリフのアルファベットを単純に割り振って音訳されていたことから、比較的容易に解読できたのである。このような共通文字を選び出す方法でヒエログリフの読み方を特定していき、「ヒエログリフは基本的に表音文字であるが、表意文字もあり、かつ1つの文字には、複数の音価を有するものもある」ことを発見したのである。この成果を『ムッシュー・ダシエへの書簡』として発表したグルノーブルの会場にはヨーロッパ各地から学者が集まり、盛大な祝賀会が開かれた。そして1824年には『プレシ：ヒエログリフ綱要 (Précis du système hiéroglyphique des anciens Égyptiens ou Recherches sur les éléments premiers de cette écriture sacrée)』を刊行し、ヒエログリフの体系が明らかとなった。彼の解読達成により死語であつた古代エジプト語は生きた言葉となり、ここにエジプト学は本格的にスタートしたのである。

最後に本書の紹介をしたい。これは1828年から約1年半、現地エジプトで調査した成果である。シャンポリオンは、イタリアの親友イッポリト・ロッセリーニ (Ippolito Rosellini) とともに、フランス・トスカナ

合同調査隊を率いてエジプトを旅する。本調査はフランス政府とトスカナの大公レオポルド2世の助成によるものであり、ナポレオン以来のエジプトで最初となる組織的な調査であった。彼らが目指したのは、古代建造物の観察とそこに刻まれた碑文の調査であり、最終的にはナポレオンによる『エジプト誌』の考古学バージョンを達成することであった。8月にアレクサンドリア港に到着した彼らは、古代遺跡を巡りながらナイル川を遡上し、南はヌビア（現スーダン）の第2急湍まで進んだ。この間、シャンポリオンが文字の詳細な記録を取り、一方ロッセリーニが図像の描写を行い、作業を分担しつつ記録を集めていった。

この成果を纏めた本書は、フランスとイタリアでそれぞれの言語で刊行された。フランス語版では全6分冊からなり、4冊は神殿や墓の壁面装飾の図版、2冊はシャンポリオン自筆のヒエログリフの写本とその注釈である。このうち、図版4冊の初版本（フランス語版）が明治大学図書館に加わった。装丁は高さ72cm、幅57cmと大判で、総図版数511葉の内46葉の彩色版を含み、『エジプト誌』を意識した作りとなっている。出版年は1835-47年であるが、シャンポリオンが志半ばで急死したため、実際の刊行は兄のジャック＝ジョゼフによる。

内容は以下の通り、ヌビア方面のナイル川上流から順に遺跡の図像資料が掲載されている（括弧は本書での名称）。

- 図版第1巻： ワディ・ハルファ、ジェベル・アッダ、アブ・シンベル (Ibsamboul)、カスル・イブリム、エル＝デッリ、アマダ、エル＝ダッカ、カラブシャ、ダボッド、フィラエ、ベイト・エル＝ワリ、オンボス
- 図版第2巻： オンボス、ジェベル・シルシラ、エドフ、エル＝カブ (Eléthya)、エスナ、アルマント (Hermonthis)、ルクソール (Thèbes)
- 図版第3巻： ルクソール
- 図版第4巻： ルクソール、デンデラ、ベニ・ハッサン、ザウィエト・エル＝アムワト (Zawyet el-Mayetyn)、コム・エル＝アハマル、サッカラ、ギザ、メンフィス、カイロ、アレクサンドリア

数多く調査した遺跡の中でもルクソールに関する図版が最も多く、第3巻では全てがルクソールの資料に充てられている。東岸のカルナック神殿やルクソール神殿、西岸では「王家の谷」や「貴族墓」など、エジプト文明が栄華を極めた新王国時代（紀元前 1550～1069 年）の遺跡を势力的に記録したことがうかがえる。なぜならここは宗教と葬送に関連する建造群が密集し、その壁面を飾る文書はシャンポリオンにとって研究資料の宝庫であったからであろう。その他特筆すべきは、ベニ・ハッサンの遺跡である。ここで彼は、『エジプト誌』では見落とされた中王国時代（紀元前 2055～1650 年）の岩窟墓を発見した。壁面の清掃により現れた葬送や宴会、戦闘やレスリング、工芸や農耕など当時の生活を生き生きと描いた彩色壁画の報告はこれが最初であり、貴重な資料である。

本書は 19 世紀初頭のエジプトの遺産を記録したもので、アスワン・ハイダム建設で移築されてしまったアブ・シンベルやフィラエの神殿、または今では壁面が劣化・崩壊してしまった遺跡も少なからず含まれており、現在でもエジプト学の研究者が参照すべき重要な文献となっている。

明治大学図書館には既に、ナポレオンの『エジプト誌』と、カール・レプシウス (Carl Richard Lepsius) の『エジプト・エチオピア記念碑 (Denkmäler aus Ägypten und Äthiopien)』の初版本が所蔵されている（両書は本学文学部教授佐々木憲一先生が『図書の譜』第 10 号にて紹介）。本書はそれらとともにエジプト学の創成に多大なる貢献をした稀覯本となっており、この 3 書を有する図書館は国内には他にない。私は 2009 年度より兼任講師として「エジプトの考古学」を担当しているが、これら書籍が刺激となって、より多くの学生がエジプト学研究を志すことを期待したい。

主要参考文献

- 近藤二郎, 2004, 『ヒエログリフを愉しむー古代エジプト聖刻文字の世界ー』, 集英社新書.
- ジャン・ラクチュール, 2005, 『シャンポリオン伝』, 河出書房新社.
- Bard, K.A.. 2007, “2 Hieroglyphs, Language, and Pharaonic Chronology”, *An Introduction to the Archaeology of Ancient Egypt*, Blackwell

Publishing, Oxford, pp.23-44.

- Bierbrier, M.L., 1995, *Who was who in Egyptology* (3rd rev. ed.), Egypt Exploration Society, London.
- Forbes, D.C., 1995-96, "Giants of Egyptology: Jean François Champolion", *KMT: A Modern Journal of Ancient Egypt* 6-4, pp.75, 88.